

本邦初のグリム童話の翻訳絵本『ハツ山羊』と、
それに影響を与えたとみられるドイツの挿絵について

**Illustrationen von Heinrich Leutemann und deren Einfluss
auf das älteste japanische Bilderbuch zu den Grimmschen
Märchen „Die acht Geißen“ (KHM 5)**

西口 拓子

Hiroko NISHIGUCHI

Zusammenfassung

„Die acht Geißen“—das ist der Titel eines Bilderbuchs, das im Jahre 1887 in Japan herauskam. Das ist eine Übersetzung des Grimmschen Märchens „Der Wolf und die sieben Geißlein“ (KHM 5), und wird in der Forschung mehrfach erwähnt, weil es wohl das erste Bilderbuch zu den „Kinder- und Hausmärchen“ der Brüder Grimm in Japan ist.

In diesem Buch wird der Name des Übersetzers (Ayatoshi KURE) genannt, aber es gibt keine Hinweise auf den Illustrator. Es wird vermutet, dass Eitaku KOBAYASHI die Bilder gemalt hat.

Bei meiner Forschung über deutsche Märchenausgaben sind mir einige Bilder von Heinrich Leutemann aufgefallen, weil sie gewisse Ähnlichkeiten zu den Illustrationen im Buch „Die acht Geißen“ aufweisen. Aus intensivem Vergleich ist zu schließen, dass der japanische Illustrator die Bilder von Leutemann gesehen haben muss. Jedoch mit originellen Ideen erweitert sind die japanischen Bilder mehr als reine Nachahmungen.

はじめに

グリム童話は、第184番の話「くぎ」が、早くも1873(明治6)年に英語の教材からの翻訳という形で日本に紹介された。¹ 単行書としての刊行は、菅了法(桐南居士)による1887(明治20)年4月の『西洋古事 神仙叢話』² が初めてである。そこには11話のグリム童話が収められている。絵本としては、1887(明治20)年9月の『ハツ山羊』³ が初とされる。これは、2

¹ 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』第9巻・第4号、岩波書店、2008年、140-151頁。

² 川戸道昭他編『明治の児童文学 翻訳編〈第1巻〉グリム集』五月書房、1999年所収。

³ 川戸道昭他編 前掲書(1999年)に『ハツ山羊』も収められている。本稿で使用した図版は全て国立国会図書館のホームページの画像による。

年後に上田萬年が翻訳した『おほかみ』(1889年)と同様に、「狼と七匹の子やぎ」の絵本である。⁴ どちらも、日本におけるグリム童話受容史を語る際には再三言及される重要な作品であるだけでなく、⁵ 「日本の絵本の発達過程の一端を担っており、絵本史上、欠かすことのできない作品」⁶ でもある。

本稿では、この『八ツ山羊』の挿絵に多大な影響を与えたとみられるドイツの挿絵を紹介したい。

『八ツ山羊』

『八ツ山羊』は、和装の単行書で、四六版の並製、袋とじ、頁数は5丁である。奥付には、出版人の名が長谷川武次郎とある。長谷川は、英語、ドイツ語、フランス語などに翻訳をした「日本昔噺シリーズ」(英語版はJapanese Fairy Tale Series)の発行者として知られている。⁷ これは、縮緬(絹織物)のようにしわを寄せて作った和紙に印刷されたため、通称ちりめん本と呼ばれているもので、主に外国人の土産物用に作られていた。⁸

『八ツ山羊』は、ちりめんではなく平紙に刷られたが、「日本昔噺シリーズ」の姉妹編として製作されたようだ。⁹ 奥付に「西洋昔噺 第一號」と記されているためである。定価は拾銭で、二百から三百冊発行されたという。¹⁰ 英語・フランス語・ドイツ語・オランダ語版の「日本昔噺」は拾銭から拾弍銭だったというから、¹¹ 同様の価格設定であった。一方で、ちりめん本は一タイトルあたりおよそ五百から千部刷られていたから、¹² もとより『八ツ山羊』の発行部数

⁴ 「狼と七匹の子やぎ」は、明治19年から明治末までの間に最も頻繁に翻訳されたグリム童話である。中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書店、2009年、13-16頁参照。

⁵ 言及のみならず、図版も頻繁に紹介されている。川戸道昭他編『前掲書(1999年)』のカバーには『八ツ山羊』の母やぎが出かける場面(図2)が印刷されている。川戸道昭他『日本におけるグリム童話翻訳書誌』(ナダ出版センター、2000年)の口絵に表紙絵(図1)が掲載されている。その他、本稿で言及する先行文献の多くに写真が掲載されている。さらにFrankfurter Allgemeine Zeitung 2009年12月3日号第39頁にも仕掛けのある頁(図8)が掲載された。

⁶ 福島右子「近代日本絵本史研究——「八ツ山羊」と「おほかみ」を中心に——」『聖和大学論集A、教育学系』第25号、1997年、291-307頁。293頁参照。

⁷ 長谷川武次郎については、次の論文に詳しい。石澤小枝子「明治の出版人 長谷川武次郎」『梅花女子大学文学部紀要 児童文学篇』第18号、2001年、1-42頁。英語版の「日本昔噺シリーズ」は、次の復刻版(日本語訳付き)が刊行されている。宮尾與男編『対訳日本昔噺集(Japanese Fairy Tale Series)』全3巻、彩流社、2009年。

⁸ 当初は、日本人の外国語学習用という意図もあったという(石澤2001年、19頁)。

⁹ 川戸道昭「グリム童話の発見——日本における近代児童文学の出発点——」川戸道昭他『前掲書(2000年)』所収。5-50頁。30頁参照。

¹⁰ 虎頭恵美子「日本におけるグリム翻訳書誌——明治期のグリム童話の本邦初訳について——」川戸道昭他『前掲書(2000年)』所収。105-123頁。123頁参照。

¹¹ 石澤2001年、17頁。また、管了法の『西洋古事 神仙叢話』(1887年)の40銭と比較すると安いものの、頁が少ないため、割高である(野口芳子「明治期におけるグリムのメルヒェンの受容——社会的背景からの考察——」『グリムのメルヒェン その夢と現実』勁草書房、1994年、136-163頁。137頁参照)。

¹² 石澤2001年、11頁。

は少なかったのである。ちりめんの「日本昔噺」は好評を博し、わずか数年で 20 号まで刊行されたのに対して、¹³「西洋昔噺」は、第 2 号としてアンデルセンの『馬かへのおきな』¹⁴ が予定され、翻訳者も鈴木甲次郎に決定していたにもかかわらず、実現はされなかった。第 1 号の売れ行きが思わしくなかったためと見られる。¹⁵

『八ツ山羊』の翻訳者である呉文聰くれあやとし (1851-1918 年) は、慶應義塾などで学び、内務省、通信局などに勤め、統計事務に携わっていた「日本の近代統計行政の黎明期を支えた統計学者」である。¹⁶ 東京専門学校 (現早稲田大学)、学習院大学科、専修学校などで統計学の講義も担当していた。¹⁷ 呉は、早くから英語を学んでいたが、統計をやる必要から明治 19 年頃よりドイツ語も学んでいたという。¹⁸ 明治 20 年当時は、通信局に勤めていたのだが、グリムを翻訳した理由は知られていない。¹⁹

同様に明らかになっていないのは、原作が「狼と七匹の子やぎ」であるのに、なぜタイトルが八匹のやぎとなっているのかということである。ここでは母やぎを含めて「8」と数えているわけではない。「八つ子をもちし牝山羊ありけり」²⁰ とあるからだ。これまで、末広がりすえひろがりの八、²¹ ヤツヤギという語呂合わせ、²² などの可能性が指摘されてきたにすぎない。八匹としている英訳も見つかっておらず、底本も含めて明らかになっていないのである。²³

呉による訳文は、なめらかな文語体である。図版は、表紙も含めて 9 点で、そのうちの 2 点には、立体的な仕掛けが施されている (図 4 と図 9)。これは、西洋の Toy Book (おもちゃ絵本) にヒントを得た可能性もあるが、²⁴ むしろ「江戸中期から草双紙にしばしば行われた」、「蓋紙

¹³ 川戸道昭編『図説 絵本・挿絵大事典』第 1 巻, 大空社, 2008 年, 234 頁。川戸によれば、「日本昔噺」を手にしたのはイギリス, アメリカ, ドイツ, フランスなどの人々で, 彼らはグリムやアンデルセン, マザーグースといった児童文学に囲まれて育ってきたのに対し, 日本では, 外国の児童文学に関心が及ぶほど, 児童文学に対する理解は未だ深まっていなかった。それは, 明治 20 年代半ば以降だったという。川戸 2000 年, 30-31 頁。

¹⁴ タイトルから, これは「小クラウスと大クラウス」と推測できる。大畑末吉訳『完訳アンデルセン童話集』第 1 巻, 岩波文庫, 1984 年, 21-42 頁。

¹⁵ 虎頭 2000 年, 123 頁。

¹⁶ 大淵知直「異文化間受容とメルヘンの変容 ——『八ツ山羊』とモラエスをめぐって——」『ヘルダー研究』日本ヘルダー学会, 2001 年, 第 7 号, 163-184 頁。166 頁参照。呉は東京統計協会を創設した人物でもある。川戸道昭他 前掲書 (2000 年), 28 頁, 47 頁。

¹⁷ 高雄馬一郎が筆記した講義録は, 明治 20 年代後半から 30 年代前半にかけて呉が専修学校で行った講義のものとして推測されている。大内兵衛他編『呉文聰著作集』第 1 巻, 財団法人日本経営史研究所, 1973 年, 683 頁。

¹⁸ 石川春江「妖精がはじめて日本に来たころ——明治期のグリム童話の翻訳」『グリム童話のふるさと』小澤俊夫他, 新潮社, 1986 年, 104-119 頁。108 頁参照。

¹⁹ 大淵 2001 年, 166 頁。

²⁰ 呉文聰訳『八ツ山羊』弘文社, 明治 20 (1887) 年, 1 丁表より。

²¹ 大淵 2001 年, 167 頁。

²² 鳥越信『大阪国際児童文学館蔵書解題』大阪国際児童文学館を育てる会, 2008 年, 149 頁。

²³ 虎頭恵美子「翻訳されたグリム童話」『図説グリム童話』河出書房新社, 2005 年, 67-68 頁。

²⁴ 川戸 2000 年, 30 頁。

をあげると図様のちがう挿絵になる工夫をほどこした本²⁵に近い。『ハツ山羊』において、絵の余白部分に文字が入っている点は、まさに「赤本的なレイアウト」²⁶である。



図1 『ハツ山羊』表紙
(国立国会図書館蔵)²⁷



図2 『ハツ山羊』1丁表
(国立国会図書館蔵)

当時は珍しくないことだが、絵師の名は明記されていない。小林永濯^{えいたく} (1843-1890年)と推定されている。²⁸ 永濯は、狩野派画家として井伊直弼に仕えたこともある絵師で、ちりめん本の挿絵で知られている。1890(明治23)年に47歳で亡くなったため、ちりめん本の第18号『羅生門(The Ogre's Arm)』(1889年)がこのシリーズでの永濯の最後の仕事である。²⁹

さて、「赤本的なレイアウト」となっている『ハツ山羊』の挿絵であるが、その「色彩は、赤本とは全く異なっており、柔らかで温かい色が用いられ」、「この意味では従来の赤本を脱却した作品」³⁰となっている。換言するなら、それらは見事に洋風に描かれているのである。³¹ 本稿ではその理由も考察してみたい。

²⁵ 瀬田貞二「絵本論——明治の絵本」『児童文学の世界』日本児童文学学会編、ほるぷ出版、1974年、227-268頁。252頁参照。例えば、『江戸仕掛本考』(林美一、有光書房、1972年)には、『ハツ山羊』と同じ仕掛けが施された本がいくつも紹介されている。

²⁶ 福島 1997年、305頁。

²⁷ 本稿図1～図10は国立国会図書館の蔵書で、画像は国立国会図書館ウェブサイトより。

²⁸ 福島 1997年、294頁。瀬田貞二『落穂ひろい(下巻)』福音館書店、1982年、117頁。

²⁹ 榊原貴教編著『図説 絵本・挿絵大事典』第2巻、2008年、227-228頁。石澤 2001年、25頁。

³⁰ 福島 1997年、305頁。

³¹ 「煉瓦の家に洋装の人や山羊が大きく描かれたカラーの挿し絵が多く、西洋の雰囲気を感じさせている」(野口 1994年、137-139頁)。「全体にヨーロッパ風な雰囲気を感じさせる」(虎頭 2000年、109頁)。

ドイツの挿絵



図 I Märchen-Wundergarten (個人蔵)³²

さて、グリム童話のふるさとドイツにおいても、これまでに数多くの挿絵が描かれ、それらも研究対象とされてきた。³³ 図 I は、ドイツにおける挿絵の歴史をたどる中で、筆者が目にした 19 世紀の挿絵である。左手前に大きく描かれている母やぎが目にとまったのだ。『八ツ山羊』の一丁表に描かれた母やぎ (図 2) と良く似ているからである。本稿ではカラーで紹介できないが、実際にはどちらも彩色されているため、³⁴ 母やぎが着用するベスト (胴着) の赤、そして下半身に巻かれた布の青が一致していることは一目瞭然であった。さらには、左脚大腿部が露出している点も酷似している。加えて図 I の右上に描かれた粉屋と狼の場面も、『八ツ山羊』の

³² 本稿においては、日本で刊行された図書からの図版はアラビア数字で (例, 図 1), ドイツで刊行された図書からの図版はローマ数字で (例, 図 I) 示す。図 I は Dr. Regina Freyberger 個人蔵。

³³ Bang, Ilse: Die Entwicklung der deutschen Märchenillustration. München 1944. / Verweyen, Annemarie: Die Illustrationen zu den Kinder- und Hausmärchen in deutschsprachigen Ausgaben der Jahre 1945-1984. In: Brüder Grimm Gedenken 1985. Marburg 1985. / Freyberger, Regina: Märchenbilder · Bildermärchen: Illustrationen zu Grimms Märchen 1819-1945. Über einen vergessenen Bereich deutscher Kunst. Oberhausen 2009 他。

³⁴ 川戸道昭他編『児童文学翻訳作品総覧 第 4 巻 ドイツ編』大空社, 2005 年, 口絵 (2-5 頁) に、『八ツ山羊』の彩色された頁が全て、カラーで掲載されている。

表紙絵（図 1）と構図が酷似している。

図 I は、„Märchen-Wundergarten“（不思議の園の童話）という大判の童話集に収められた挿絵である。これは 27 話からなる選集で、そのうちの 6 話にロイテマン（Heinrich Leutemann, 1824-1905 年）、オフターディンガー（Carl Offterdinger, 1829-1889 年）、クリムシュ（Eugen Klimesch, 1839-1896 年）が描いたカラーの挿絵が付けられている。ただしこれは、1893 年にドイツのシュトゥットガルトで発行されたものであるから、³⁵ 『八ツ山羊』の刊行より後である。

調査の結果、図 I を描いたロイテマンが、その 10 年ほど前に „Deutsche Kinder-Märchen“（ドイツの童話集）³⁶ という選集にも良く似た挿絵を描いていることが分かり、この本を直接手に取り確認することができた。本書に刊行年は明記されていないが、まえがきにある日付から 1884 年だと推定されている。よって、1887 年刊行の『八ツ山羊』に先行しており、これに影響を与えた可能性があることになる。ただし、ロイテマンはこれ以前にもいくつもの童話集に挿絵を描いており、同様の絵が既に描かれていた可能性もある。ロイテマンのその他の挿絵については今後も調査を続ける。

今回の考察に用いた „Deutsche Kinder-Märchen“ には、グリム、ベヒシュタイン、ペローの童話が計 12 話収録されており、各話に 6 枚ずつ、計 72 枚の挿絵が付けられている。絵と文は完全に分離され、絵は（頁の隅に置かれた小さなカットを除いて）全てカラーで別刷りされている。また一つの頁に複数の場面が配置されている図 I とも異なり、こちらは一頁に描かれているのは一場面のみである。挿絵を描いたのはロイテマンとオフターディンガーで、「狼と七匹の子やぎ」には、ロイテマンによる 6 枚の挿絵が、本文の 20 頁と 21 頁の間に挟まれている。³⁷ そこに描かれた場面を、掲載されている順に挙げると以下ようになる。

1. 小売商と狼（図 IV）
2. パン屋と狼（図 V）
3. 粉屋と狼（図 II）
4. 子やぎの家に押し入る狼（図 VI）
5. 井戸の周りで踊るやぎの母子（図 VII）
6. 森に出かけていく母やぎ（図 III）

³⁵ Märchen-Wundergarten. Eine Sammlung echter Kindermärchen. Herausgegeben von T. Hoffmann. Stuttgart 1893.

³⁶ Deutsche Kinder-Märchen: zwölf Lieblingsmärchen für die Jugend. Mit 72 Farbdruckbildern nach Aquarellen von C. Offterdinger u. H. Leutemann. Stuttgart / Leipzig [1884].

³⁷ オフターディンガーによる挿絵には C.O.などのサインが入っており、両者の挿絵の区別に役立っている。

母やぎが森に出かける場面は、実際には冒頭で語られるが、ここでは6番目に掲載されている。これは、製本時にカラー頁を挟む際に生じた手違いだと考えられる。というのも本書では、ベヒシュタイン (Ludwig Bechstein, 1801-1860年) の童話から採用した「はりねずみとうさぎのかけ比べ」と「親指小僧」の挿絵も順序が入り乱れているからだ。³⁸

この „Deutsche Kinder-Märchen“ に掲載された6枚の挿絵と『八ツ山羊』の挿絵を比較した結果、いくつかが酷似していることが明らかとなった。それは、『八ツ山羊』の挿絵が、前者を見ることなく描かれたとは考えがたいほどなのである。

以下、『八ツ山羊』の順序に沿って、両書の挿絵とその類似点を紹介する。

『八ツ山羊』表紙



図 11 3枚目の挿絵
(Staatsbibliothek)³⁹



図 1 (再掲) 『八ツ山羊』表紙
(国立国会図書館蔵)

ここに描かれているのは、狼が足を白く塗らせる場面である。グリムによる原作では狼がそのために訪れるのはパン屋と粉屋であるが、『八ツ山羊』の翻訳文では、ペンキ屋になっているため、絵もそれに合わせたものとなっている。ドイツ版の粉屋は、白いシャツに緑のズボン、その上に青い上っ張りを着ているが、日本のペンキ屋は、水色のつなぎの上に白い上っ張りを

³⁸ 筆者が目にするのが出来たのは、ベルリンの国立図書館が所蔵する一冊のみであるため、この一冊限りの落丁なのか、他の本も同様なのかに関しては、確認はできなかった。

³⁹ 図 II～図 VII は、Staatsbibliothek, Preußischer Kulturbesitz, Kinder- und Jugendbuchabteilung, Berlin の蔵書より。

着用しているように見える。色使いは逆になっているが、絵全体の構図は酷似している。背後に描かれた家の古びた壁の具合も色合いも良く似ている。

さらに細かく見ていくと、相違点も目に付く。ドイツ版では、原作通り粉屋の男が描かれているため、背後の家は水車小屋である。よって狼の背後には水車が見える(図 II 拡大図)。一方、日本版ではペンキ屋であるから、水車は消え、粉の入った袋は樽に変わり、樽の上には刷毛が置かれている。樽の手前には、赤と青のペンキの入ったバケツも置かれている。



図 II 拡大図 (Staatsbibliothek)

『ハツ山羊』1丁表



図 III 6枚目の挿絵
(Staatsbibliothek)



図 2 (再掲) 『ハツ山羊』1丁表
(国立国会図書館蔵)

比較のため、図 2 を再掲する。こうして並置すると、類似点が明確となる。母やぎの服の色形だけでなく、2 本足で立ち、履物を身につけていない点も一致している。ただし、家から顔

を出している子やぎの数は一見どちらも 4 匹のように見えるが、ロイテマンは前列中央に 5 匹目の口を小さく描いている。

これは童話の冒頭の場面であるが、ここで、原作と呉の翻訳文を比べてみたい。

グリム

ある日、お母さんやぎは、森に行つて食べ物をとつてこようと思ひました。そこで七匹をみんな呼びよせて、こう言ひました。「ねえおまへたち、私は森へ行つてくるから、狼に気をつけるのですよ。狼が入つて来たら、おまへたちをまるごと食べてしまうでしょう。悪い狼は、よく姿も変えるけれど、しわがれ声と、黒い足ですぐに分かりますよ。」子やぎたちはこう言ひました。「お母さん、私たちは気をつけるから、心配せずに出かけてください。」そこでお母さんやぎはメエと鳴いて、安心して出かけました。⁴⁰ (下線は筆者)

呉訳

ある日市街^{ちちやう}に行かん^ゆとして子どもらにむかひ、るすのうちはかたく戸をとちて、たれがきたるともかならずあくることなかれ、皆々おとなしくすせよ、みやげには昔^{うま}き物^{もの}をたくさんかふてきて、あたへんとねんごろにいひおみていでゆきぬ⁴¹ (下線は筆者)

ここから分かるように、呉の翻訳は、筋が大きく変えられることはないものの、グリムの原典の忠実な翻訳とはなっていない。それは全体的にみても言えることである。ここでは、母やぎが細かく与えている注意が省かれているだけでなく、母やぎは「なかよくおしよ」と言いながら出かけている。その言葉は、翻訳文中ではなく、絵の中（母やぎの左）に書かれている。これも赤本風の配置である。

何より、母やぎは「森」に食料を調達に行くのではなく、「市街」に行くことに変わっている。そのため熊手のような農具を持って⁴² 町に出かけるのは不自然であるから、日本版の挿絵では棒になっていることにも着目できる（図 III、図 2 拡大図参照）。それに伴い、ドイツ版の麦わら帽子が、日本版では籠になっているようにも見える。

⁴⁰ Rölleke, Heinz (Hrsg.): Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen. 3 Bde. Stuttgart 2010, Bd.1, S.50f.

⁴¹ 呉文聰訳『八ツ山羊』弘文社、明治 20 (1887) 年、1 丁裏より。

⁴² ドイツの挿絵においては、母やぎはロイテマンの絵と同じ農具を持った姿でしばしば描かれている。Hermann Vogel, Ludwig Richter, Erich Schröder, Karl Wagner らが描いた「狼と七匹の子やぎ」の挿絵を参照。



図 11 拡大図
(Staatsbibliothek)



図 2 拡大図
(国立国会図書館蔵)

また、母やぎの手つき（左前足）が相違するものの、やぎたちの住まいは良く似ている。それでも、家の前にある段は、ドイツ版では赤煉瓦の一段であるのに対して、日本版では青いタイルが二段となっている。

『ハツ山羊』2丁表

『ハツ山羊』に施された二つの仕掛けのうち、一つ目が、狼が戸を叩く場面にある（もう一方は、図 8, 9 を参照）。家の戸の部分が蓋紙（上紙）となっており、これを横にめくると、子やぎたちの姿が見える（図 4）。



図 3 『ハツ山羊』2丁表
(国立国会図書館蔵)

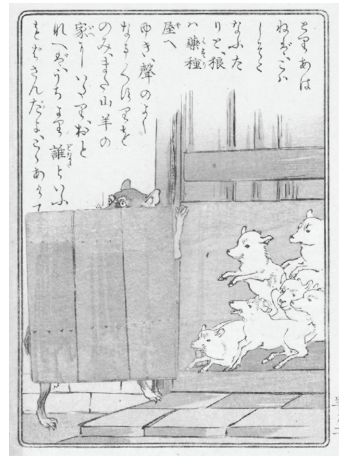


図 4 『ハツ山羊』2丁表の仕掛けの
扉を開いたところ
(国立国会図書館蔵)

図3の「狼がやぎの家の戸を叩く場面」に相当する場面は、挿絵では頻繁に描かれるモチーフのひとつだが、⁴³ „Deutsche Kinder-Märchen“ では描かれていない。

『ハツ山羊』2丁裏

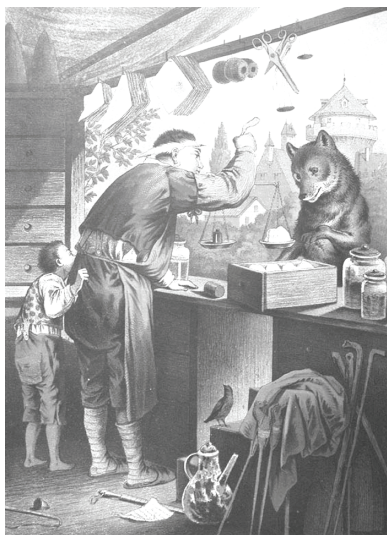


図 IV (Staatsbibliothek)



図 V (Staatsbibliothek)

グリムによる原作では、狼は小売商のところに行き、大きな石灰の塊 (ein großes Stück Kreide) をひとつ購入する。それを描いたのが図 IV である。狼はこれをかじることでしわがれ声をなめらかにするのだ。石灰は邦訳では白墨(チョーク)と訳されることが多いが、⁴⁴ ここでは石灰の塊として描かれている。図 IV においては、小売商の男の左の靴下(かかと部分)に穴があいており、ロイテマンは細部もリアルに描いていることが分かる。

こうして狼は声を変えるものの、足が黒いために子やぎたちに見破られてしまう。そして次にパン屋に行き、「足をぶつけたから、パン生地を前足に塗ってくれ」⁴⁵ と頼む。それが図 V である。狼は、続いて粉屋に行き、生地の上に粉をふるってもらう。その場面は、本稿の冒頭で紹介した図 II に描かれている。

一方の『ハツ山羊』の狼は、声を良くするためには、石灰ではなく薬を飲んでいる。そのた

⁴³ Uther, Hans-Jörg: Handbuch zu den »Kinder- und Hausmärchen« der Brüder Grimm. Berlin 2008, S.14.

⁴⁴ 金田訳では「大きな白墨」、高橋訳では「大きなチョーク」であるが、野村訳では挿絵と同様に「大きな石灰のかたまり」となっている。金田鬼一訳『完訳グリム童話集』第1巻, 1979年, 67頁。高橋健二訳『グリム童話集』国土社, 2006年, 15頁。野村滋訳『完訳グリム童話集』第1巻, ちくま文庫, 2005年, 73頁。

⁴⁵ Rölleke 2010, Bd.1, S.51.

めドイツ版の図 IV と図 V に相当する場面は存在しない。さらに、狼が「^{くすりや}薬種屋」⁴⁶ で買い物をする場面も日本版では描かれていない。



図5 『八ツ山羊』2丁裏 (国立国会図書館蔵)

『八ツ山羊』では、狼はペンキ屋に足を白くしてもらう。よって、表紙絵にはペンキ屋の男が描かれていた (図 1)。図 5 の狼は、ロイテマンによる図 II の狼と姿勢が似ているが、日本版のほうが、より踏ん返り返った格好となっており、狼の尊大さが表現されている。しかし、現実的に考えるならば、後ろ足にペンキを塗らせることにはあまり意味がない。戸を叩いて子やぎに見せるのは「前足」だからだ。

『八ツ山羊』3丁表



図 VI
(Staatsbibliothek)



図 6 『八ツ山羊』3丁表
(国立国会図書館蔵)

⁴⁶ 呉文聰訳『八ツ山羊』弘文社、明治 20 (1887) 年、2 丁表より。

図 VI と図 6 においては、狼が2本足で立ち、服を身に着けていない点は同じだが、扉の開く方向は対称的であり、一見したところ、この二枚にはさほど類似点はないように見える。しかしここでは、左下に見える、下半身（後ろ半分）のみ描かれている子やぎに着目したい。これも明らかに、ロイテマンの挿絵からの影響と見られる。ところが日本版には、ここに関してはさらなる趣向が凝らされている。図6は、見開きで左側の頁に当たるが、これをめくると図7が現れるのだ。

『ハツ山羊』3丁裏

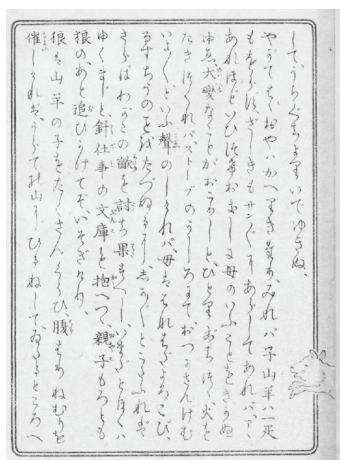


図7 『ハツ山羊』3丁裏（国立国会図書館蔵）

図7の右下には、前頁の子やぎの上半身（前半分）が描かれているのである。このように、八匹目の子やぎが頁をまたいで描かれており、かろうじて一匹のみが「ストーブの影」（グリムの原作では時計の箱の中）に逃げおおせることが視覚的にも捉えられるわけである。さらに頁をめくる楽しみも生み出しており、これは、日本の研究者たちに高く評価されているアイデアでもある。⁴⁷ 今回の考察からは、このアイデアの端緒はロイテマンにあることが推測されるが、日本の絵師は、ロイテマンの絵を単に模倣するにとどまらず、それをさらに発展させている。

⁴⁷ 「右ページの欄外にある駆けよってくる子山羊の絵は秀逸」（石澤 2001年, 32頁）。「これは明らかにページめくりの効果によるものであり、評価できる点である」（福島 1997年, 305頁）。

『ハツ山羊』4丁表



図8 『ハツ山羊』4丁表
(国立国会図書館蔵)



図9 『ハツ山羊』4丁表の蓋紙を開いたところ
(国立国会図書館蔵)

図8には、やぎの子を食べて満腹となり寝ている狼が描かれている。狼の腹には蓋紙(上紙)が付いている。そこへ、母やぎが「敵を討ち果」たすべく、⁴⁸「針仕事の文庫を抱へて」やってくる。「鉋にて其腹をきりひらけば」のところで蓋紙をめくると、図9のように、「七疋の子山羊ヒョイヒョイととび出」す仕掛けとなっている。ここでは、『ハツ山羊』であるから、食べられてしまった子やぎの数がグリムの原作より一匹多い「七疋」なのである。

狼が寝ているこの場面も、ロイテマンの挿絵には描かれておらず、仕掛けも含めて、日本版のオリジナルだと思われる。

⁴⁸ ここは呉の翻訳により日本化された箇所である。「仇討ち物としての雰囲気を増幅している点である」(大淵 2001年, 171頁)。

『ハツ山羊』4丁裏-5丁表



図 VII
(Staatsbibliothek)



図 10 『ハツ山羊』4丁裏と5丁表（見開き）
(国立国会図書館蔵)

最後に、喉が渴いた狼は、グリムによる原作では井戸から、『ハツ山羊』では池から水を飲もうとするが、腹の中の石の重みで落ちて溺死してしまう。その後、子やぎたちは喜びながら母親と一緒に踊る。ロイテマンによる絵では、子どもたちと踊る母やぎからはいつの間にもやら服が消えているが（10年ほど後に描いた図Iにおいても同様に着衣なし）、日本版では、——他のドイツの多くの挿絵と同様に——最後まで同じ服を着たままである。

以上の絵の他、裏表紙に、ふたりの少女を影絵風に描いた絵がさらに一枚あり、図版は計9枚となるのだが、本文とは関連がないものであるため割愛する。

おわりに

ロイテマンはいくつもの童話集に挿絵を描いているため、日本の絵師が目にしたのがこの本であるとまでは特定できないが、本稿で指摘した類似点からは、『ハツ山羊』の挿絵がロイテマンの絵に多大な影響を受けて描かれたことが推測される。⁴⁹ ロイテマンのその他の挿絵本に関する研究は今後の課題としたい。

⁴⁹ ロイテマンによる挿絵に影響を受けたのは、日本の絵師だけではないようだ。ドイツにおいても、ヴァーグナー (Karl Wagner) によるポストカード (1911年) に描かれた母やぎ (農具と服) と、家に押し入ろうとする狼に、ロイテマンの挿絵との類似点がみられる。

こうした絵の「翻訳」なり「模倣」は、明治から大正にかけては珍しいことではなかった。⁵⁰ 当時の意識が今日とは異なっていたことは、『八ツ山羊』の絵師とされる永濯によるちりめん本への挿絵を、その弟子が模倣し公刊していることにも象徴される。⁵¹

とりわけ、明治時代は、西洋の事物を描くことは容易ではなかったはずである。当時のグリム童話の挿絵では、——『八ツ山羊』の2年後に上梓された『おほかみ』の挿絵のように——大胆に「日本化」され登場人物が着物を身につけていることも少なくない。⁵²

結局のところ、日本におけるグリム童話の最初の絵本である『八ツ山羊』は、みごとに洋風の絵となっているが、これはロイテマンの絵の影響なしには考えられなかっただろう。とはいえ、それは単なる模倣にとどまっていたのではない。絵と文字のレイアウトは和風に（赤本風に）変えられ、新たに仕掛けが施されただけでなく、逃げるやぎが頁をまたいで描かれるアイデアも盛り込まれ、それは独自のものへと発展したのであった。

これは、グリム童話の「挿絵」が明治期の日本においてどのように受容されたかのひとつの例でもある。

本稿は、平成22年度専修大学研究助成「民間伝承の受容とメディア」の研究成果の一部である。

謝辞

本稿での図版の使用をご快諾いただきましたことに深く感謝申し上げます。

国立国会図書館 (National Diet Library, Tokyo) (図=Abb. 1-10)

Dr. Regina Freyberger (図=Abb. I)

Staatsbibliothek, Preußischer Kulturbesitz, Kinder- und Jugendbuchabteilung, Berlin (図=Abb. II-VII)

参考文献

小澤俊夫「明治期、日本人はグリム童話をどう受け入れたか」『図説子どもの本・翻訳の歩み事典』子どもの本・翻訳の歩み研究会編、柏書房、2002年、42-43頁。

Ikeda, Hiroko: The Introduction of foreign Influences on Japanese Children's Literature

⁵⁰ 三宅興子「『絵本』の「翻訳」史・試論」『図説 児童文学翻訳大事典』児童文学翻訳大事典編集委員会編、第4巻、大空社、2007年、11-29頁。

⁵¹ 永濯がちりめん本の『玉の井』(1887年)のために描き、奥付に印刷された絵を、その弟子の永興が模倣し、巖谷小波校訂による英訳の「日本昔噺」No.2『玉の井』の表紙絵(1903年)として使っている。(石澤小枝子「IWAYA'S FAIRY TALES OF OLD JAPANについて」『梅花児童文学』第11号、2003年、1-21頁。6頁参照。同20頁には両者の図版が掲載されており、酷似していることが明らかである。)

⁵² 『明治期グリム童話翻訳集成』(川戸道昭他編、アイアールディー企画(紀伊國屋書店)、全5巻、1999年)にそうした図版も多数収録されている。

through Grimm's Household Tales. In: Brüder Grimm Gedenken 1963. Hrsg. v. Ludwig Denecke, Marburg 1963, S.575-583.

Noguchi, Yoshiko: Rezeption der Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm in Japan. Inaugural Dissertation. Marburg 1977.

Noguchi, Yoshiko: Die erste japanische Übersetzung Grimmscher Märchen und ihr geschichtlicher Hintergrund. In: Brüder Grimm Gedenken 1981. Hrsg. v. Ludwig Denecke, Marburg 1981, S.422-434.